

闇と暴力からの回復

—東方キリスト教的考察のための諸資料—

中 里 巧

序

闇と暴力について思索するとき、北欧精神史において突出して顕れてくるのは、「血の復讐」である。バイキング時代において、「血の復讐」は聖なる掟として尊重され、民会において親族を殺害された者は、殺害した者から解決金（家畜や宝物など）を受け取るか、殺害した者に対して復讐するために、これを殺害するか選択しなければならなかった。殺害を選択したにもかかわらず、これを遂行しないのは、勇気のない印と見なされて、人々から侮辱された。バイキングにおいてはこうした侮辱は、死に値するものであった。しかもその死は、今生きている血族のみならず、一切の血族すなわち死者も含まれていた。生者も死者も共に、血族一切が死の侮辱を受けるのであった。死の侮辱とはすなわち、魂の侮辱であり、生と死の一切の世界において侮辱を受けるのであった。本稿においては、考察上必要な諸資料を提示する。

1. トラウマ論文献

こうした「血の復讐」は、かつてのバイキングに留まる歴史的過去の事象ではない。現在に続く解決困難なアポリアである。このアポリアについては、「トラウマ論」が様々な問題解決に向けた試論を提供している。以下に「トラウマ論」文献を概括的に列挙する。

デーヴ＝グロスマン・ローレン＝クリステンセン著、安原和見訳『「戦争」の心理学—人間における戦闘のメカニズム—』、二見書房、2008年。

デーヴ＝グロスマン著、安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』ちくま学芸文庫、筑摩書房、2004年。

蟻塚亮二著『沖繩戦と心に傷—トラウマ診療の現場から—』、大月書店、2014年。

中村江里著『戦争とトラウマ—不可視化された日本兵の戦争神経症—』吉川弘文館、2017年。

蟻塚亮二・須藤康宏著『3.11と心の災害—福島にみるストレス症候群—』大月書店、2016年。

沖繩戦＝精神保健研究会編『戦争と心—沖繩からの提言—』沖繩タイムス社、2017年。

金城重明著『「集団自決」を心に刻んで—沖繩キリスト者の絶望からの精神史—』高文研、1995年。

ベッセル＝ヴァン＝デア＝コーク著、柴田裕之訳『身体はトラウマを記録する—脳・心・体のつながりと回復のための手法—』紀伊國屋書店、2016年。

森茂起著『トラウマの発見』講談社選書メチエ、講談社、2005年。

ベッセル＝ヴァン＝デア＝コルク他著『トラウマティック＝ストレス—PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて—』誠信書房、2001年。

W.G.ゼーバルト著、鈴木仁子訳『空襲と文学』白水社、2008年。

太田保之・吉峯悦子・三根真理子著『原始野のトラウマ—被爆者再検証—ここに傷をみつめて—』長崎新聞社、2014年。

保坂廣志著『沖繩戦のトラウマ—心に突き刺す棘—』柴峰出版、2014年。

宮地尚子著『トラウマ』岩波新書、岩波書店、2013年。

岡野憲一郎著『新外傷性精神障害—トラウマ理論を越えて—』岩崎学術出版社、2009年。

ジュディス＝L.ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復』（増補版）みすず書房、1999年。

橋本明子著、山岡由美訳『日本の長い戦後—敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか—』みすず書房、2017年。

キャシー＝カルース著、下河辺美知子訳『トラウマ・歴史・物語—持ち主なき出来事—』みすず書房、2005年。

下河辺美知子著『トラウマの声を聞く—共同体の記憶と歴史の出来事—』みすず書房、2006年。

佐々木正美著『子どもへのまなざし』福音館書店、1998年。

宮地尚子著『トラウマの医療人類学』（新装版）みすず書房、2019年。

宮地尚子著『環状島—トラウマの地政学—』（新装版）みすず書房、2018年。

マーク＝ミカーリ・ポール＝レルナー編、金吉晴訳『トラウマの過去—産業革命から第一次世界大戦まで—』みすず書房、2017年。

アリス＝ミラー著、山下公子訳『魂の殺人』（新装版）新曜社、2013年。

宮地尚子著『傷を治せるか』大月書店、2010年。

信田さよ子著『傷つく人、傷つける人』ホーム社、2013年。

ジェームズ＝ギリガン著、佐藤和夫訳『男が暴力をふるうのはなぜか—そのメカニズムと予防—』大月書店、2011年。

アリス＝ミラー著、山下公子訳『真実をとく鍵—作品がうつしだす幼児体験—』新曜

社、2004年。

アリス＝ミラー著、山下公子訳『禁じられた知—精神分析と子どもの真実—』新曜社、1985年。

アリス＝ミラー著、山下公子訳『沈黙の壁を打ち砕く—子どもの魂を殺さないために—』新曜社、1994年。

2. マザーテレサ関連文献

修道女マザーテレサ（一九一〇年～一九九七年）は、多くの年月を要するカトリック教会の列福列聖認定の慣例を破って、二〇〇三年には福人となり、死後二〇年足らずの二〇一六年には、聖人となった。晩年のマザーテレサは、カトリック教徒であるなしにかかわらず周囲の多数の人々からすでに、愛を放射し奇跡おこなう生きた聖人のように受け取られていた。二〇〇七年に、マザーテレサが創設した神の愛の宣教師会の司祭 B. コロディエジュック（Brian Kolodiejchuk 一九七七年～現在）が刊行した『来て、私の光となりなさい—コルカタの聖人の私文書集—』*Come Be My Light -The Private Writing of the Saint of Calcutta-* は、生活を共にしていた修道女さえ知らなかったマザーテレサの信仰の暗闇（darkness）を明らかにしたため、多くの人々の驚きとなった。ここで付記しなければならないのは、B. コロディエジュックが一九九九年に神の愛の宣教師会によってマザーテレサの列福列聖請願者として任命されて、『来て、私の光となりなさい』に所収された私文書を含めた三万五千頁におよぶ列福列聖請願書を、バチカンに提出していることであり、請願書をとおして信仰の闇の事実を知ったうえで、バチカンは、マザーテレサを列福列聖したということである。キリスト教思想には、聖人は信仰の闇を体験するものが多いという理解がある。マザーテレサの信仰の暗闇の体験は、キリスト教正教の二世紀にまで遡りうる砂漠の父祖の信仰から始まり、中世の十字架のヨハネ（John of the Cross /San Juan de la Cruz 一五四二年～一五九一年）をへて、現代の J. チャップマン（John Chapman 一八六五年～一九三三年）や T. マートン（Thomas Merton 一九一五年～一九六八年）にいたる神秘主義の思潮に属する。神秘主義には、肯定の道と否定の道があるが、J. チャップマンがその著作『霊性についての書簡』（一九三五年）*The spiritual Letters* で簡潔に述べているように、時代状況は、宗教が真実ではなく信仰をもたないことこそ真実だ、という感覚に満ちている。こうした時代感覚を T. マートンは、その著作『霊想祈祷』（一九七一年）*Contemplative Prayer* や『霊想のための新しい種』（一九六一年）*New Seeds of Contemplation* のなかで、何もよりどころがなく、どんなに神を信じようとしても空しく、どこまで突き詰めていっても神のリアリティを感じ取れず、心のなかに暗闇が広がっていく次元が否定の道であると云い、J. チャップマンは、如何に否定の道が耐えがたく救いのないものであろうとも、祈ることを放棄してはならない、と云う。マザーテレサの神秘主

義は、まさにこうした位相の信仰体験であり、P. ムレイ (Paul Murray) の著作『私は夜のイエスを愛した』(二〇〇八年) *I loved Jesus in the Night* や二〇一七年アメリカのアヴェマリア大学で開催されたマザーテレサの神秘主義にかんするシンポジウムをまとめた『マザーテレサと神秘主義』(二〇一八年) *Mother Teresa and the Mystics* などの資料がある。

マザーテレサの苦悩は、燃え尽き症候群やうつ病と云った類いではないというのが私見である。ただし、キリスト教神学におけるたんなる信仰上の神秘体験や神秘主義に収斂されるものでもないと思う。T. マートンやJ. チャップマンも同様であるが、マザーテレサの場合も、トラウマ論における心的外傷の諸要因を考慮したほうが、より具体的に理解できるというのが私見である。神秘主義と呼ばれる特性は、むしろ、たんなる信仰上の葛藤や苦悩の延長線上にあるものではなくて、心的外傷に対する宗教的治癒の一側面であるように思う。以下に、マザーテレサやこれと関連する資料を列挙する。マザーテレサが語る闇、J. チャップマンやT. マートンが語る否定神学や否定の道、言い換えれば彼らの信仰上の苦悩は、キリスト教思想成立の発端にまで遡るまことに本質的な事象であり、彼ら自身はカトリック教会に所属しているけれども、キリスト教成立の発端にまで歴史的に遡ることができる教会伝承や史料を保存継承してきた東方キリスト教的考察をおこなううえで、マザーテレサ・J. チャップマン・T. マートンは優れた指標となっている。

マザーテレサ 写真集

Mother Teresa, Faith and Compassion -the Life and Work of Mother Teresa-, by Raghhu Rai and Navin Chawla, Element, Shaftesbury, 1996.

Mother Teresa -a Life of Dedication-, English-language edition, by Raghu Rai, project managed by Céline Moulard, Harry N. Abrams, New York, 2004.

マザーテレサ オリジナル

Mother Teresa, Come be my Light -the private Writings of the "Saint of Calcutta"-, edited and with Commentary by Brian Kolodiejchuk MC, Doubleday, New York, London, 2007.

マザーテレサ 思想研究報告書類

Mother Teresa's Secret Fire -the Encounter that changed her Life, and how it can transform your own-, by Joseph Langford, Our Sunday Visitor, Huntington, Indiana, 2008.

Mother Teresa, in the Shadow of our Lady -Sharing Mother Teresa's mystical Relationship with Mary-, by Joseph Langford MC, Our Sunday Visitor, Huntington, 2007.

I thirst -40 days with Mother Teresa-, by Joseph Langford MC, Augustine Institute, Greenwood Village, Colorado, 2006.

ジャック＝ゴティエ著、伊従信子訳『イエスの渴き—小さきテレーズとマザーテレサ—』女子パウロ会、2007年 (Jacques Gauthier: *J'AI SOIF -de la petite Thérèse à Mère Teresa-, Padrole et Silence, Geneva, 2003*)。

I thirst -Thérèse of Lisieux and Mother Teresa- -a striking Commentality in the spiritual Foundation of Saint Thérèse of Calcutta-, Canfield, by Jacques Gauthier, translated by Alexandra Plettrenberg-Serban, St.Pauls /Alba House, 2005 (Jacques Gauthier: *J'AI SOIF -de la petite Thérèse à Mère Teresa-, Padrole et Silence, Geneva, 2003*).

Mother Teresa -in the Shadow of our Lady- -sharing Mother Tresa's mystical Relationship with Mary-, Joseph Langford MC, Our Sunday Visitor, Huntington, 2007.

Mother Teresa's Mysticism -a Christo-ecclesio-humano-centric Mysticism-, by Robert M. Garrity, Lectio, Hobe Sound, 2017,

Mother Teresa and the Mystics -toward a Renewal of spiritual Theology-, edited by Michael Dauphinais, Brian Kolodiejchuk MC and Roger W.Nutt, foreword by H.James Towey, Sapientia Press of Ave Maria University, Ave Maria, 2018.

Mother Teresa -Where there is Love, there is God- -a Path to closer Union with God and greater Love for Ohters-, compiled and edited by Brian Kolodiejchuk MC, Image, New York, 2010.

I loved Jesus in the Night -Teresa of Calcutta, a secret revealed-, by P`aul Murray, Darton, Longman and Todd, London, 2008.

Mother Teresa -a Call to Mercy- -Hearts to Love, Hands to Serve-, edited and with a preface and introduction by Brian Kolodiejchuk MC, Image, New York, 2016.

I thirst -Jesus called St. Faustina and St. Teresa of Calcutta to share his Thirst for Souls-, revelation by George W.Kosicki CSB, Marian Press, Stockbridge, 2000.

Mother Teresa -no greater Love-, edited by Becky Benenate & Joseph Durepos, New World Library Novato, 2001 (1997), <originally published as *The Mother Teresa Reader -a Life for God-*, compiled by La Vonne Neff, Servant publications, 1995>.

マザーテレサ 一般報告書類

Mother Teresa -in my own Words-, compiled by José Luis González -Balado, Liguori Publications, Liguori, 1997.

Mother Teresa's Lessons of Love & Secrets of Sanctity, by Susan Conroy, Our Sunday Visitor, Huntington, 2003.

Praying with Mother Teresa -Prayers, Insights, and Wisdom of Saint Teresa of Calcutta-, by Susan Conroy, Marian Press, Stockbridge, 2016 (a revised printing of *Praying in the Presence of Our Lord with Mother Teresa*, by Susan Conroy, Our Sunday Visitor, Huntington, 2005).

Mother Teresa -an Authorized Biography-, by Kathryn Spink, revised and updated, Harper Collins Publishers, New York, 2011.

The Love that made Mother Teresa -how her secret Visions and dark Nights can help you conquer the Slums of your Heart-, by David Scott, foreword by Archbishop José H. Gomez, Sophia Institute Press, Manchester, New Hampshire, 2016 (first published in 2013, a revised version of *A Revolution of Love -the Meaning of Mother Teresa-*, Loyola press, Chicago 2005).

十字架のヨハネ オリジナル

The collected Works of St. John, translated by Kieran Kavanaugh and Otilio Rodriguez, ICS Publications, Institute of Carmelite Studies, Washington, D.C., third edition, 2017 (1991).

Ascent of Mount Carmel, by Saint John of the Cross -doctor of the church-, translated from the critical edition of P.Silverio De Santa Teresa and edited by E. Allison Peers, Martino Fine Books, Eastford, 2016.

Dark Night of the Soul, by St. John of the Soul, translated by E. Allison Peers, from the critical edition of P.Silverio de Santa Teresa, Martino Fine Books, Eastford, 2017.

中世イギリス匿名著者 オリジナル

The Cloud of Unknowing and The Book of Privy Counseling, translated and edited by William Johnston, Image, New York, 2014 (1973, 1996).

J. チャップマン オリジナル

Spiritual Letters, by John Chapman, Burns & Oates, London & New York, 2004 (the Trustees of Downside Abby, 1935).

T. マートン オリジナル

Contemplative Prayer, by Thomas Merton, Image, New York, 1969.

遠藤周作 オリジナル

遠藤周作著『沈黙』新潮文庫 新潮社、1981年(1966年)。

遠藤周作著『沈黙の声』青志社、2017年。

映画

「魂の行方」First Reformed 2017 (USA), directed by Paul Schrader.

3. 初期キリスト教正教にまで遡る闇との葛藤

シリアのイサク(ニネヴェの主教・シリアの克肖者)(Ο Όσιος Ισαάκ ο Σύρος

Επίσκοπος Νινευί/ The Monk Isaac the Syrian, Bishop of Ninevah, ca.613-700) は、悪ないし悪魔や悪霊の起源を神に求めており、同様に、これらが究極的にはいずれ浄化されて神に還元していくと考えていた。オリゲネス=アダマンティウス (Origenes Adamantius/ Origen of Alexandria ca.184-253)、ティトゥス=フラウィウス=クレメンス (アレクサンドリアのクレメンス) (Titus Flavius Clemens/ Clement of Alexandria, ca.150-215)、ニュッサのグレゴリオス (Γρηγόριος Νύσσης/ Gregory of Nyssa, ca.335-395) とも、シリアのイサクと同様に、新約聖書使徒行伝第3章第21節にもとづいて、万物帰新説 (万人救済論・万物回帰説・万物復興説) を主張した。この説は、553年第二回コンスタンチノーブル公会議において否定されたが、否定神学的な神秘主義の側面から考察するなら、また、「トラウマ論」的に考察するなら、むしろ万物帰新説は肯定されるべきであるように思う。苦悩 (トラウマ) は、浄化と神への帰一の希望 (回復の希望) 抜きにしては、癒えるものではないと思うのである。砂漠の父祖に関する文献について下記に列挙する。

The Book of mystical Chapters –Meditations of the Soul’s Ascent, from the Desert Fathers and other early Christian Contemplatives-, translated by John Anthony McGuckin, Shambhala, Boston & London, 2003.

Reflecitons of the 44 Sayings of Abba Arsenius, by Abba Anthony Curley, Saint Anthony Retreat, Monastery of Mary in the Wilderness, Montana, 2018.

Evagrius of Pontus -talking back a Monastic Handbook for Combating Demons-, translated David Brakke, Cisterician Publications, Kentucky, 2009.

An Introdution to the Desert Fathers, by John Wortley, Cambridge University press, Cambridge, 2019.

More Saying of the Desert Fathers –an English translation and notes-, edited by John Wortley, Cambridge University press, Cambridge, 2019.

なお L. ハーマンはトラウマの治癒について、「お話療法」などや、自覚的意識のなかで統合されなければ快癒しないこと、言い換えれば、言葉化していかなければならないと云っている¹。しかし、私にはどうしても、この言葉化に抵抗がある。言葉をめぐって学校教育や既成の学問的常識やマスメディアによるイメージの固着化などの理由からかもしれないが、言葉がそれほどの力があるとは思えないのである。むしろ、沈黙や静寂さのなかで、ないしは、自覚的意識の手助けとなるような特性ではない言葉、例えば、常套の祈祷文や詩ないしは溜息のような無意識に出てくる独り言のようなもののほうが、慰めになるよ

1 本ジュディス=L. ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復』(増補版) みすず書房、1999年のうち、12頁以下。

うに思うのである。おそらく、そうした言葉たちは、慰めにはなっても、社会化されないのかもしれない。社会化されることによってはじめて、トラウマの原因が立体的に視覚化されるのかもしれない。ひょっとすると、私自身が言葉と云うものの本質を未だにわかりきっていないのかもしれない。日常的に日々書き残すと云った持続的-継続的アプローチが必要であるというのは、分かるように思う。人の心はそうそう変わるものではないし、変えるには、日々の継続的営みがきわめて効果的だからである。ただし、メモして書き残すと云ったことであっても、メモして書き残すという作業には、いわば日常に貼り付いた自分ではない、そのように日常に癒着した自分を見つめる自分が出現するようには思う。主観-客観という枠組みや反省する自分と反省される自分といった枠組みにおける主観的自分ではなくて、むしろ、もう一つの人格と言った方がより正確であるような、そうした自分が出現するよう思う。この自分は、日常の多忙さには脆弱的であって、あっという間にまたたく間に、消失してしまう。

4. 闇と暴力に関する言葉（口語訳聖書から）

以下に、闇と暴力に関する概念を探求するうえで、基礎的資料となる主な言葉、すなわち、復讐（血の復讐）・報復・暴力・目には目・害（迫害・害悪・危害・殺害）・侮辱・はずかしめについて、列挙する。自害（自殺）・怒りなどその他の関連する言葉については、次回以降に列挙することにする。

復讐（血の復讐）

創世記：4：15（主はカインに言われた、「いや、そうではない。だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう」。そして主はカインを見付ける者が、だれも彼を打ち殺すことのないように、彼に一つのしるしをつけられた）。創世記4：24（カインのための復讐が七倍ならば、ノレメクのための復讐は七十七倍）。民数記31：3（モーセは民に言った、「あなたがたのうちから人を選んで戦いのために武装させ、ミデアンびとを攻めて、主のためミデアンびとに復讐しなさい」。民数記35：12（これはあなたがたが復讐する者を避けてのがれる町であって、人を殺した者が会衆の前に立って、さばきを受けないうちに、殺されることのないためである）。民数記35：19（血の復讐をする者は、自分でその故殺人を殺すことができる。すなわち彼に出会うとき、彼を殺すことができる）。民数記35：21（あるいは恨みによって手で人を打って死なせたならば、その打った者は必ず殺されなければならない。彼は故殺人だからである。血の復讐をする者は、その故殺人に出会うとき殺すことができる）。民数記35：24-25（会衆はこれらのおきてによって、その人を殺した者と、血の復讐をする者との間をさばかなければならない。すなわち会衆はその人を殺した者を血の復讐をする者の手から救い出して、逃げて行ったのがれの町に

返さなければならない。その者は聖なる油を注がれた大祭司の死ぬまで、そこにいなければならない。民数記 35:27 (血の復讐をする者は、のがれの町の境の外で、これに出会い、血の復讐をする者が、その人を殺した者を殺しても、彼には血を流した罪はない)。申命記 19:6 (そうしなければ、復讐する者が怒って、その殺した者を追いかけて、道が長いために、ついに追いついて殺すであろう。しかし、その人は以前から彼を憎んでいた者でないから、殺される理由はない)。申命記 19:12 (その町の長老たちは人をつかわれて彼をそこから引いてこさせ、復讐する者にわたして殺させなければならない)。詩篇 58:10 (正しい者は復讐を見て喜び、その足を悪しき者の血で洗うであろう)。エゼキエル書 25:17 (「……わたしは怒りに満ちた懲罰をもって、大いなる復讐を彼らになす。わたしが彼らにあだを返す時、彼らはわたしが主であることを知るようになる」。ミカ書 5:15 (そしてわたしは怒りと憤りとをもって、その聞き従わないもろもろの国民に復讐する)。ローマ人への手紙 12:19 (愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである)。ヘブル人への手紙 10:30 (「復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と言われ、また「主はその民をさばかれる」と言われたかたを、わたしたちは知っている)。

報復

創世記 9:5 (あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう)。申命記 32:41 (わたしがきらめくつるぎをとき、手にさばきを握るとき、わたしは敵にあだを返し、わたしを憎む者に報復するであろう)。申命記 32:43 (「……国々の民よ、主の民のために喜び歌え。主はそのしもべの血のために報復し、その敵にあだを返し、その民の地の汚れを清められるからである」。士師記 11:36 (娘は言った、「父よ、あなたは主に誓われたのですから、主があなたのために、あなたの敵アンモンの人々に報復された今、あなたが言われたとおりにわたしにしてください」。士師記 20:10 (「……「すなわちイスラエルのすべての部族から百人について十人、千人について百人、万人について千人を選んで、民の糧食をとらせ、民はベニヤミンのギベアに行き、ベニヤミンびとがイスラエルにおいておこなったすべてのみだらな事に対して、報復しましょう」。サムエル記下 4:8 (イシボセテの首をヘブロンにいるダビデのもとに携えて行って王に言った、「あなたの命を求めたあなたの敵サウルの子イシボセテの首です。主はきょう、わが君、王のためにサウルとそのすえとに報復されました」。サムエル記下 14:11 (女は言った、「どうぞ王が、あなたの神、主をおぼえて、血の報復をする者に重ねて滅ぼすことをさせず、わたしの子の殺されることのないようにしてください」。王は言った、「主

は生きておられる。あなたの子の髪の毛一筋も地に落ちることはないでしょう。列王紀下9:26(「……すなわち主は言われた、『まことに、わたしはきのうナボテの血と、その子らの血を見た』。また主は言われた、『わたしはこの地所であなたに報復する』と。それゆえ彼を取りあげて、その地所に投げず、主の言葉のようになさい。ヨブ記33:27(「……彼は人々の前に歌って言う、『わたしは罪を犯し、正しい事を曲げた。しかしわたしに報復がなかった……』。詩篇99:8(われらの神、主よ、あなたは彼らに答えられた。あなたは彼らにゆるしを与えられた神であったが、悪を行う者には報復された)。イザヤ書35:4(心おののく者に言え、「強くあれ、恐れてはならない。見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」と)。イザヤ書59:17(主は義を胸当としてまとい、救のかぶとをその頭にいただき、報復の衣をまとして着物とし、熱心を外套として身を包まれた)。イザヤ書61:2「主の恵みの年と／われわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め……」。イザヤ書63:4「報復の日がわが心のうちにあり、わがあがないの年が来たからである……」。イザヤ書66:6(聞けよ、町から起る騒ぎを。宮から聞える声を。主がその敵に報復される声を)。エレミヤ書50:15(その周囲に叫び声をあげよ、彼女は降伏した。そのとりでは倒れ、その城壁はくずれた、主があだをかえされたからだ。彼女に報復せよ、彼女がおこなったように、これに行え)。エレミヤ書50:28(聞けよ、バビロンの地から逃げ、のがれてきた者の声がする。われわれの神、主の報復、その宮の報復の事をシオンに告げ示す)。エレミヤ書51:6(バビロンのうちからのがれ出て、おのおのその命を救え。その罰にまきこまれて断ち滅ぼされてはならない。今は主があだを返される時だから、それに報復をされるのである)。哀歌3:60(あなたはわたしに対する彼らの報復と、陰謀とを、ことごとくごらんになりました)。ヨエル書3:4(ツロとシドンよ、ペリシテのすべての地方よ、おまえたちは、わたしとなんのかかわりがあるか。おまえたちはわたしに報復をしようとするのか。もしおまえたちがわたしに報復しようとするなら、わたしは時をうつさず、すみやかに、おまえたちのおこないの報復をおまえたちの頭上にこさせる)。ヨエル書3:7(見よ、わたしはおまえたちが売ったその所から彼らを起して、おまえたちのおこないの報復をおまえたちの頭上にこさせる)。ヨエル書3:21(「……わたしは彼らに血の報復をなし、とがある者をゆるさない。主はシオンに住まわれる」。ナホム書1:2(主はねたみ、かつあだを報いる神、主はあだを報いる者、また憤る者、主はおのがあだに報復し、おのが敵に対して憤りをいやく)。ローマ人への手紙11:9(ダビデもまた言っている、「彼らの食卓は、彼らのわなとなれ、網となれ、つまずきとなれ、報復となれ……」。ローマ人への手紙12:19(愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである)。テサロニケ人への第二の手紙

1:8 (その時、主は神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し……。)ヘブル人への手紙 10:30 (「復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と言われ、また「主はその民をさばかれる」と言われたかたを、わたしたちは知っている)。ヨハネの黙示録 6:10 (彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」)。ヨハネの黙示録 18:6 (彼女がしたとおりに彼女にし返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ)。ヨハネの黙示録 19:2 (「……そのさばきは、真実で正しい。神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、神の僕たちの血の報復を、彼女になさったからである」)。

暴力

ヨブ記 30:18 (それは暴力をもって、わたしの着物を捕え、はだ着のえりのように、わたしをしめつける)。詩篇 55:9 (主よ、彼らのはかりごとを打ち破ってください。彼らの舌を混乱させてください。わたしは町のうちに暴力と争いとを見るからです)。詩篇 72:14 (彼らのいのちを、しえたげと暴力とからあがなう。彼らの血は彼の目に尊い)。詩篇 73:6 (それゆえ高慢は彼らの首飾となり、暴力は衣のように彼らをおおっている)。詩篇 74:20 (あなたの契約をかえりみてください。地の暗い所は暴力のすまいで満ちています)。

目には目

出エジプト記 21:24 (目には目、歯には歯、手には手、足には足)。レビ記 24:20 (すなわち、骨折には骨折、目には目、歯には歯をもって、人に傷を負わせたように、自分にもされなければならない)。申命記 19:21 (あわれんではならない。命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足をもって償わせなければならない)。マタイによる福音書 5:38 (『目には目を、歯には歯を』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである)。

害 (迫害・害悪・危害・殺害)

創世記 16:5 そこでサライはアブラムに言った、「わたしが受けた害はあなたの責任です。わたしのつかえめをあなたのふところに与えたのに、彼女は自分のはらんだのを見て、わたしを見下げます。どうか、主があなたとわたしの間をおさばきになるように」。創世記 19:9 (彼らは言った、「退け」。また言った、「この男は渡ってきたよそ者であるのに、いつも、さばきびとになろうとする。それで、われわれは彼らに加えるよりも、おまえに多

くの害を加えよう」。彼らはロトの身に激しく迫り、進み寄って戸を破ろうとした)。創世記 26 : 29 (われわれはあなたに害を加えたことはなく、ただ良い事だけをして、安らかに去らせたのですから、あなたはわれわれに悪い事をしてはなりません。まことにあなたは主に祝福されたかたです)。創世記 31 : 7 (しかし、あなたがたの父はわたしを欺いて、十度もわたしの報酬を変えた。けれども神は彼がわたしに害を加えることをお許しにならなかった)。創世記 31 : 29 (「わたしはあなたがたに害を加える力をもっているが、あなたがたの父の神が昨夜わたしに告げて、『おまえは心して、ヤコブによしあしを言うな』と言われました。』)。創世記 31 : 52 (この石塚を越えてわたしがあなたに害を加えず、またこの石塚とこの柱を越えてあなたがわたしに害を加えないように、どうかこの石塚があかしとなり、この柱があかしとなるように)。出エジプト記 8 : 24 (主はそのようにされたので、おびたしいあぶが、パロの家と、その家来の家と、エジプトの全国にはいつてきて、地はあぶの群れのために害をうけた)。出エジプト記 21 : 22 (もし人が互に争って、身ごもった女を撃ち、これに流産させるならば、ほかの害がなくとも、彼は必ずその女の夫の求める罰金を課せられ、裁判人の定めるとおりに支払わなければならない)。出エジプト記 21 : 23 (しかし、ほかの害がある時は、命には命)。出エジプト記 23 : 29 (しかし、わたしは彼らを一年のうちには、あなたの前から追い払わないであろう。土地が荒れすたれ、野の獣が増して、あなたを害することのないためである)。民数記 5 : 19 (女に誓わせて、これに言わなければならない、「もし人があなたと寝たことがなく、またあなたが、夫のもとにあって、道ならぬ事をして汚れたことがなければ、のろいの苦い水も、あなたに害を与えないであろう……」)。民数記 5 : 28 (しかし、もし女が身を汚した事がなく、清いならば、害を受けなくて、子を産むことができるであろう)。民数記 16 : 15 (モーセは大いに怒って、主に言った、「彼らの供え物を顧みないでください。わたしは彼らから、ろば一頭をも取ったことなく、また彼らのひとりをも害したことはありません」)。民数記 32 : 17 (しかし、われわれは武装してイスラエルの人々の前に進み、彼らをその所へ導いて行きましょう。ただわれわれの子供たちは、この地の住民の害をのがれるため、堅固な町々に住ませておかなければなりません)。民数記 35 : 23 (あるいは人のいるのも見ずに、人を殺せるほどの石を投げつけて死なせた場合、その人がその敵でもなく、また害を加えようとしたのでもない時は……)。申命記 7 : 22 (あなたの神、主はこれらの国民を徐々にあなたの前から追い払われるであろう。あなたはすみやかに彼らを滅ぼしつくしてはならない。そうでなければ、野の獣が増してあなたを害するであろう)。申命記 30 : 7 (あなたの神、主はまた、あなたを迫害する敵と、あなたを憎む者と共に、このもろもろののろいをこうむらせられるであろう。士師記 11 : 27 (「……わたしはあなたに何も悪い事をしたこともないのに、あなたはわたしと戦って、わたしに害を加えようとしま。審判者であられる主よ、どうぞ、きょう、イスラエルの人々とアンモンの人々との間

をおさばきください」。士師記 15:3 (サムソンは彼らに言った、「今度はわたしがペリシテびとに害を加えても、彼らのことでは、わたしに罪がない」。サムエル記上 20:7 (もし彼が「良し」と言われるなら、しもべは安全ですが、怒られるなら、わたしに害を加える決心でおられるのを知ってください)。サムエル記上 20:9 (ヨナタンは言った、「そのようなことは決してありません。父があなたに害を加える決心をしていることがわたしにわかっているならば、わたしはそれをあなたに告げないでおきましょうか」。サムエル記上 20:13 (しかし、もし父があなたに害を加えようと思っているのに、それをあなたに知らせず、あなたを逃がして、安全に去らせないならば、主よ、どうぞ幾重にも、このヨナタンを罰してください。どうぞ主が父と共におられたように、あなたと共におられますように)。サムエル記上 23:9 (ダビデはサウルが自分に害を加えようとしているのを知って、祭司アビヤタルに言った、「エポデを持ってきてください」。サムエル記上 24:9 (そしてダビデはサウルに言った、「どうして、あなたは『ダビデがあなたを害しようとしている』という人々の言葉を聞かれるのですか……」)。サムエル記上 25:7 (わたしはあなたが羊の毛を切っておられることを聞きました。あなたの羊飼たちはわれわれと一緒にいたのですが、われわれは彼らを少しも害しませんでした。また彼らはカルメルにいる間に、何ひとつ失ったことはありません)。サムエル記上 25:15 (しかし、あの人々はわれわれに大へんよくしてくれて、われわれは少しも害を受けず、またわれわれが野にいた時、彼らと共にいた間は、何ひとつ失ったことはありませんでした)。サムエル記上 25:26 (それゆえ今、わが君よ、主は生きておられます。またあなたは生きておられます。主は、あなたがきて血を流し、また手ずから、あだを報いるのをとどめられました。どうぞ今、あなたの敵、およびわが君に害を加えようとする者は、ナバルのごとくになりますように)。サムエル記上 25:34 (「……わたしがあなたを害することをとどめられたイスラエルの神、主はまことに生きておられる。もしあなたが急いでわたしに会いにこなかったならば、あすの朝までには、ナバルのところに、ひとりの男も残らなかったでしょう」)。サムエル記上 26:21 (その時、サウルは言った、「わたしは罪を犯した。わが子ダビデよ、帰ってきてください。きょう、わたしの命があなたの目に尊く見られたゆえ、わたしは、もはやあなたに害を加えないであろう。わたしは愚かなことをして、非常なまちがいをした」)。サムエル記下 12:18 (七日目にその子は死んだ。ダビデの家来たちはその子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。それは彼らが、「見よ、子のなお生きている間に、われわれが彼に語ったのに彼はその言葉を聞きいれなかった。どうして彼にその子の死んだことを告げることができようか。彼は自らを害するかも知れない」と思ったからである)。サムエル記下 15:14 (ダビデは、自分と一緒にエルサレムにいるすべての家来に言った、「立て、われわれは逃げよう。そうしなければアブサロムの前からのがれることはできなくなるであろう。急いで行くがよい。さもないと、彼らが急ぎ追いついて、われ

われに害をこうむらせ、つるぎをもって町を撃つであろう』)。サムエル記下 18 : 32 (王はクシびとに言った、「若者アブサロムは平安ですか」。クシびとは答えた、「王、わが君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あの若者のようになりますように』)。サムエル記下 20 : 6 (ダビデはアビシャイに言った、「ビクリの子シバは今われわれにアブサロムよりも多くの害をするであろう。あなたの主君の家来たちを率いて、彼のあとを追いなさい。さもないと彼は堅固な町々を獲て、われわれを悩ますであろう』)。サムエル記下 24 : 16 (天の使が手をエルサレムに伸べてこれを滅ぼそうとしたが、主はこの害悪を悔い、民を滅ぼしている天の使に言われた、「もはや、じゅうぶんである。今あなたの手をとどめるがよい」。その時、主の使はエブスびとアラウナの打ち場のかたわらにいた)。列王紀上 11 : 25 (彼はソロモンの一生の間、イスラエルの敵となって、ハダデがしたように害をなし、イスラエルを憎んでスリヤを治めた)。列王紀下 8 : 12 (ハザエルは言った、「わが主よ、どうして泣かれるのですか」。エリシャは答えた、「わたしはあなたがイスラエルの人々にしようとする害悪を知っているからです。すなわち、あなたは彼らの城に火をかけ、つるぎをもって若者を殺し、幼な子を投げうち、妊娠の女を引き裂くでしょう』)。歴代志上 16 : 22 (「わが油そそがれた者たちに、さわってはならない。わが預言者たちに害を加えてはならない』)。歴代志下 24 : 21 (しかし人々は彼を害しようとして計り、王の命によって、石をもって彼を主の宮の庭で撃ち殺した)。エズラ記 4 : 15 (歴代の記録をお調べください。その記録の書において、この町はそむいた町で、諸王と諸州に害を及ぼしたものであることを見、その中に古来、むほんの行われたことを知られるでしょう。この町が滅ぼされたのはこれがためなのです)。エズラ記 4 : 22 (「……あなたがたは慎んでこのことについて怠ることのないようにしなさい。どうして損害を増して、王に害を及ぼしてよかろうか』)。ネヘミヤ記 2 : 10 (ところがホロニびとサンバラテおよびアンモンびと奴隷トビヤはこれを知り、イスラエルの子孫の福祉を求める人が来たというので、大いに感情を害した)。ネヘミヤ記 6 : 2 (そこでサンバラテとガシムはわたしに使者をつかわして言った、「さあ、われわれはオノの平野にある一つの村で会見しよう」と。彼らはわたしに危害を加えようと考えていたのである)。エステル記 7 : 7 (王は怒って酒宴の席を立ち、宮殿の園へ行ったが、ハマンは残って王妃エステルに命ごいをした。彼は王が自分に害を加えようと定めたのを見たからである)。エステル記 9 : 2 (ユダヤ人はアハシュエロス王の各州にある自分たちの町々に集まり、自分たちに害を加えようとする者を殺そうとしたが、だれもユダヤ人に逆らうことのできるものはなかった。すべての民がユダヤ人を恐れたからである)。ヨブ記 4 : 8 (わたしの見た所によれば、不義を耕し、害悪をまく者は、それを刈り取っている)。ヨブ記 15 : 35 (「……彼らは害悪をはらみ、不義を生み、その腹は偽りをつくる』)。ヨブ記 21 : 27 (見よ、わたしはあなたがたの思いを知り、わたしを害しようとするたくらみを知る)。詩篇 7 : 14 (見よ、悪しき

者は邪悪をはらみ、害毒をやどし、偽りを生む)。詩篇7:16 (その害毒は自分のかしらに帰り、その強暴は自分のこうべに下る)。詩篇10:7 (その口はのろいと、欺きと、しえたげとに満ち、その舌の下には害毒と不正とがある)。詩篇28:3 (悪しき者および悪を行う者らと共に、わたしを引き行かないでください。彼らはその隣り人とむつまじく語るけれども、その心には害悪をいだく者です)。詩篇55:10 (彼らは昼も夜も町の城壁の上を歩きめぐり、町のうちには害悪と悩みとがあります)。詩篇69:26 (彼らはあなたが撃たれた者を迫害し、あなたが傷つけられた者をさらに苦しめるからです)。詩篇94:20 (定めをもって危害をたくらむ悪しき支配者は、あなたと親しむことができるでしょうか)。詩篇105:15 (「わが油そそがれた者たちに、さわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない」。) 詩篇119:84 (あなたのしもべの日はどれほど続くでしょうか。いつあなたは、わたしを迫害する者を、さばかれるでしょうか)。詩篇119:86 (あなたの戒めはみな真実です。彼らは偽りをもってわたしを迫害します。わたしをお助けください)。詩篇140:9 (わたしを囲む者がそのこうべをあげるとき、そのくちびるの害悪で彼らをおおってください)。箴言12:21 (正しい人にはなんの害悪も生じない、しかし悪しき者は災をもって満たされる)。箴言13:20 (知恵ある者とともに歩む者は知恵を得る。愚かな者の友となる者は害をうける)。箴言26:6 (愚かな者に託して事を言い送る者は、自分の足を切り去り、身に害をうける)。伝道の書5:13 (わたしは日の下に悲しむべき悪のあるのを見た。すなわち、富はこれをたくわえるその持ち主に害を及ぼすことである)。伝道の書8:9 (わたしはこのすべての事を見た。また日の下に行われるもろもろのわざに心を用いた。時としてはこの人が、かの人を治めて、これに害をこうむらせることがある。イザヤ書25:4 (あなたは貧しい者のとりでとなり、乏しい者の悩みのときのとりでとなり、あらしをさける避け所となり、熱さをさける陰となられた。あらぶる者の及ぼす害は、石がきを打つあらしのごとく)。イザヤ書59:4 (ひとりも正義をもって訴え、真実をもって論争する者がいない。彼らはむなしきことを頼み、偽りを語り、害悪をはらみ、不義を産む)。エレミヤ書7:6 (寄留の他国人と、みなしごと、やもめをしえたげることなく、罪のない人の血をこの所に流すことなく、また、ほかの神々に従って自ら害をまねくことをしないならば……)。エレミヤ書11:19 (しかしわたしは、ほふられに行く、おとなしい小羊のようで、彼らがわたしを害しようと、計りごとをめぐらしているのを知らなかった。彼らは言う、「さあ、木とその実を共に滅ぼそう。生ける者の地から彼を絶って、その名を人に忘れさせよう」。) エレミヤ書15:15 (主よ、あなたは知っておられます。わたしを覚え、わたしを顧みててください。わたしを迫害する者に、あだを返し、あなたの寛容によって、わたしを取り去らないでください。わたしがあなたのために、はずかしめを受けるのを知ってください)。エレミヤ書25:7 (しかしあなたがたはわたしに聞き従わず、あなたがたの手で作った物をもって、わたしを怒らせて自ら害を招いた

と、主は言われる)。エレミヤ書 39:12 (「彼をとり、よく世話をせよ。害を加えることなく、彼があなたに言うようにしてやりなさい)。エレミヤ書 44:7 (万軍の神、イスラエルの神、主は今こう言われる、あなたがたはなぜ大いなる悪を行って自分自身を害し、ユダのうちから、あなたがたの男と女と、子供と乳のみ子を断って、ひとりも残らないようにしようとするのか)。エレミヤ書 48:2 (モアブの誉は、消え去った。ヘシボンで人々はモアブの害を図り、「さあ、この国を断ち滅ぼそう」という。マデメンよ、おまえもまた滅ぼされる、つるぎがおまえを追う)。ダニエル書 3:25 (王は答えて言った、「しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ)。ダニエル 6:20 (ダニエルのいる穴に近づいたとき、悲しげな声をあげて呼ばわり、ダニエルに言った、「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか)。ダニエル書 6:22 (「……わたしの神はその使をおくって、ししの口を閉ざされたので、ししはわたしを害しませんでした。これはわたしに罪のないことが、神の前に認められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかったのです)。ダニエル書 6:2 (そこで王は大いに喜び、ダニエルを穴の中から出せと命じたので、ダニエルは穴の中から出されたが、その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである)。ダニエル書 11:27 (このふたりの王は、害を与えようと心にはかり、ひとつ食卓に共に食して、偽りを語るが、それは成功しません。終りはなお定まった時の来るまでこないからです)。ホセア書 4:2 (ただのろいと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている)。ゼカリヤ書 7:10 (「……やもめ、みなしご、寄留の外国人および貧しい人を、しえたげてはならない。互に人を害することを、心に図ってはならない)。ゼカリヤ書 8:17 (あなたがたは、互に人を害することを、心に図ってはならない。偽りの誓いを好んではならない。わたしはこれらの事を憎むからであると、主は言われる)。マタイによる福音書 5:10 (義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである)。マタイによる福音書 5:11 (わたしのために人々があなたがたをのしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである)。マタイによる福音書 5:12 (喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである)。マタイによる福音書 5:44 (しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ)。マタイによる福音書 10:23 (一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい。よく言うておく。あなたがたがイスラエルの町々を回り終らないうちに、人の子は来るであろう)。マタイによる福音書 13:21 (その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう)。マタイによる福音書 23:

34 (それだから、わたしは、預言者、知者、律法学者たちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町から町へと迫害して行くであろう)。マルコによる福音書 4:17 (自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう)。マルコによる福音書 10:30 (必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける)。マルコによる福音書 16:18 (へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる)。ルカによる福音書 10:19 (わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう)。ルカによる福音書 11:49 (「……それゆえに、『神の知恵』も言っている、『わたしは預言者と使徒とを彼らにつかわすが、彼らはそのうちのある者を殺したり、迫害したりするであろう』……)。ルカによる福音書 21:12 (しかし、これらのあらゆる出来事のある前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害をし、会堂や獄に引き渡し、わたしの名のゆえに王や総督の前にひっぱって行くであろう)。ヨハネによる福音書 15:20 (「……わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう……)。使徒行伝 7:52 (いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、ひとりでもいたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となった)。使徒行伝 8:1 (サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った)。使徒行伝 9:1 (さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら、大祭司のところに行って……)。使徒行伝 9:4-5 (彼は地に倒れたが、その時「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。そこで彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねた。すると答があった、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」。使徒行伝 11:19 (さて、ステパノのことで起った迫害のために散らされた人々は、ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語っていなかった)。使徒行伝 13:50 (ところが、ユダヤ人たちは、信心深い貴婦人たちや町の有力者たちを煽動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出させた)。使徒行伝 18:10 (あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる)。使徒行伝 22:4 (そして、この道を迫害し、男であれ女であれ、縛りあげて獄に投じ、彼らを死に至らせた)。使徒

行伝 22 : 7-8 (「……わたしは地に倒れた。そして、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と、呼びかける声を聞いた。これに対してわたしは、『主よ、あなたはどなたですか』と言った。すると、その声が、『わたしは、あなたが迫害しているナザレ人イエスである』と答えた……)。使徒行伝 26 : 11 (それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました)。使徒行伝 26 : 14 (「……わたしたちはみな地に倒れましたが、その時ヘブル語でわたしにこう呼びかける声を聞きました、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげのあるむちをければ、傷を負うだけである』。そこで、わたしが『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、主は言われた、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである……』)。使徒行伝 27 : 10 (「皆さん、わたしの見るところでは、この航海では、積荷や船体ばかりでなく、われわれの生命にも、危害と大きな損失が及ぶであろう。使徒行伝 27 : 21 (みんなの者は、長いあいだ食事もしないでいたが、その時、パウロが彼らの中に立って言った、「皆さん、あなたがたが、わたしの忠告を聞き入れて、クレテから出なかつたら、このような危害や損失を被らなくてすんだはずであった……」。使徒行伝 28 : 5 (ところがパウロは、まむしを火の中に振り落して、なんの害も被らなかつた)。ローマ人への手紙 8 : 35 (だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か)。ローマ人への手紙 12 : 14 (あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない)。ローマ人への手紙 13 : 10 (愛は隣りに害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである)。コリント人への第一の手紙 4 : 12 (苦勞して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び……)。コリント人への第一の手紙 15 : 9 (実際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であつて、使徒と呼ばれる値うちのない者である)。コリント人への第二の手紙 4 : 9 (迫害に会つても見捨てられない。倒されても滅びない)。コリント人への第二の手紙 12 : 10 (だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである)。ガラテヤ人への手紙 1 : 13 (ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわつていた)。ガラテヤ人への手紙 1 : 23 (ただ彼らは、「かつて自分たちを迫害した者が、以前には撲滅しようとしていたその信仰を、今は宣べ伝えている」と聞き……)。ガラテヤ人への手紙 4 : 29 (しかし、その当時、肉によって生れた者が、霊によって生れた者を迫害したように、今でも同様である)。ガラテヤ人への手紙 5 : 11 (兄弟たちよ。わたしがもし今でも割礼を宣べ伝えていたら、どうして、いまなお迫害されるはずがあろうか。そうしていたら、十字架のつまずきは、なく

なっているであろう)。ガラテヤ人への手紙6:12(いったい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、迫害を受けたくないばかりに、あなたがたにして割礼を受けさせようとする)。ピリピ人への手紙3:6(熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である)。テサロニケ人への第一の手紙2:15(ユダヤ人たちは主イエスと預言者たちとを殺し、わたしたちを迫害し、神を喜ばせず、すべての人に逆らい……)。テサロニケ人への第二の手紙1:4(そのために、わたしたち自身は、あなたがたがいま受けているあらゆる迫害と患難とのただ中で示している忍耐と信仰とにつき、神の諸教会に対してあなたがたを誇としている)。テモテへの第一の手紙1:13(わたしは以前には、神をそしめる者、迫害する者、不遜な者であった。しかしわたしは、これらの事を、信仰がなかったとき、無知なためにしたのだから、あわれみをこうむったのである)。テモテへの第二の手紙3:11(それから、わたしがアンテオケ、イコニオム、ルステラで受けた数々の迫害、苦難に、よくも続いてきてくれた。そのひどい迫害にわたしは耐えてきたが、主はそれらいっさいのことから、救い出して下さったのである)。テモテへの第二の手紙3:12(いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける)。ペテロの第一の手紙3:13(そこで、もしあなたがたが善に熱心であれば、だれが、あなたがたに危害を加えようか)。ヨハネの黙示録9:4(彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された)。ヨハネの黙示録9:19(馬の力はその口と尾とにある。その尾はへびに似ていて、それに頭があり、その頭で人に害を加えるのである)。ヨハネの黙示録11:5(もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、その者はこのように殺されねばならない)。

侮辱

サムエル記上25:39(ダビデはナバルが死んだと聞いて言った、「主はほむべきかな。主はわたしがナバルの手から受けた侮辱に報いて、しもべが悪をおこなわないようにされた。主はナバルの悪行をそのこうべに報いられたのだ」。ダビデはアビガイルを妻にめとろうと、人をつかわして彼女に申し込んだ)。ネヘミヤ記6:13(彼が買収されたのはこの事のためである。すなわちわたしを恐れさせ、わたしにこのようにさせて、罪を犯させ、わたしに悪名をきせて侮辱するためであった)。マタイによる福音書22:6(またほかの人々は、この僕たちをつかまえて侮辱を加えた上、殺してしまった)。マルコによる福音書12:4(また他の僕を送ったが、その頭をなぐって侮辱した)。ルカによる福音書11:45(ひとりの律法学者がイエスに答えて言った、「先生、そんなことを言われるのは、わたしたちまでも侮辱することです」)。ルカによる福音書20:11(そこで彼はもうひと

りの僕を送った。彼らはその僕も袋だたきにし、侮辱を加えて、から手で帰らせた)。ルカによる福音書 23：11 (またヘロデはその兵卒どもと一緒にあって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした)。コリント人への第二の手紙 12：10 (だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである)。

はずかしめ

創世記 34：2 (その地のつかさ、ヒビびとハモルの子シケムが彼女を見て、引き入れ、これと寝てはずかしめた)。レビ記 18：7-8 あなたの母を犯してはならない。それはあなたの父をはずかしめることだからである。彼女はあなたの母であるから、これを犯してはならない。あなたの父の妻を犯してはならない。それはあなたの父をはずかしめることだからである)。レビ記 18：10 (あなたのむすこの娘、あるいは、あなたの娘の娘を犯してはならない。それはあなた自身をはずかしめることだからである)。レビ記 18：14 (あなたの父の兄弟の妻を犯し、父の兄弟をはずかしめてはならない。彼女はあなたのおばだからである)。レビ記 18：16 (あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることだからである)。レビ記 20：11 (その父の妻と寝る者は、その父をはずかしめる者である。彼らはふたりとも必ず殺されなければならない。その血は彼らに帰するであろう)。レビ記 20：20-21 (人がもし、そのおばと寝るならば、これはおじをはずかしめることであるから、彼らはその罪を負い、子なくして死ぬであろう。人がもし、その兄弟の妻を取るならば、これは汚らわしいことである。彼はその兄弟をはずかしめたのであるから、彼らは子なき者となるであろう)。申命記 21：14 (その後あなたがもし彼女を好まなくなったならば、彼女を自由に去らせなければならない。決して金で売ってはならない。あなたはすでに彼女をはずかしめたのだから、彼女を奴隷のようにあしらってはならない)。申命記 22：24 (あなたがたはそのふたりを町の門にひき出して、石で撃ち殺さなければならない。これはその女が町の内におりながら叫ばなかったからであり、またその男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたはこうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなければならない)。申命記 22：29 (女を犯した男は女の父に銀五十シケルを与えて、女を自分の妻としなければならない。彼はその女をはずかしめたゆえに、一生その女を出すことはできない)。申命記 25：3 (彼をむち打つには四十を越えてはならない。もしそれを越えて、それよりも多くむちを打つときは、あなたの兄弟はあなたの目の前で、はずかしめられることになるであろう)。ヨシュア記 5：9 (その時、主はヨシュアに言われた、「きょう、わたしはエジプトのはずかしめを、あなたがたからころがし去った」。それでその所の名は、今日までギルガルと呼ばれている)。士師記 19：24 (ここに処女で

あるわたしの娘と、この人のめかけがいます。今それを出しますから、それはずかしめ、あなたがたの好きなようにしなさい。しかしこの人にはそのようなつまらない事をしないでください。士師記 19：25 (しかし人々が聞きいれなかったので、その人は自分のめかけをとって彼らのところに出した。彼らはその女を犯して朝まで終夜はずかしめ、日ののぼるころになって放し帰らせた)。士師記 20：5 (ギベアの人々は立ってわたしを攻め、夜の間に、わたしのおる家を取り囲んで、わたしを殺そうと企て、ついにわたしのめかけをはずかしめて、死なせました)。サムエル記上 11：2 (しかしアンモンびとナハシは彼らに言った、「次の条件であなたがたと契約を結ぼう。すなわち、わたしが、あなたがたすべての右の目をえぐり取って、全イスラエルをはずかしめるということだ」)。サムエル記上 20：30 (その時サウルはヨナタンにむかって怒りを発し、彼に言った、「あなたは心の曲った、そむく女の産んだ子だ。あなたがエッサイの子を選んで、自分の身をはずかしめ、また母の身をはずかしめていることをわたしが知らないと思うのか……」)。サムエル記上 20：34 (ヨナタンは激しく怒って席を立ち、その月のふつかには食事をしなかった。父がダビデをはずかしめたので、ダビデのために憂えたからである)。列王紀下 19：3 (彼らはイザヤに言った、「ヒゼキヤはこう申されます、『きょうは悩みと、懲らしめと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、これを産み出す力がないのです』」)。歴代志上 10：4 (そこでサウルはその武器を執る者に言った、「つぎを抜き、それをもってわたしを刺せ。さもないと、これらの割礼なき者が来て、わたしをはずかしめるであろう」。しかしその武器を執る者がいたく恐れて聞きいれなかったので、サウルはつぎをとってその上に伏した)。ネヘミヤ記 1：3 (彼らはわたしに言った、「かの州で捕囚を免れて生き残った者は大いなる悩みと、はずかしめのうちにあり、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼かれたままであります」と)。ネヘミヤ記 2：17 (しかしわたしはついに彼らに言った、「あなたがたの見るとおり、われわれは難局にある。エルサレムは荒廃し、その門は火に焼かれた。さあ、われわれは再び世のはずかしめをうけることのないように、エルサレムの城壁を築こう」)。ネヘミヤ記 4：4 (「われわれの神よ、聞いてください。われわれは侮られています。彼らのはずかしめを彼らのこうべに返し、彼らを捕囚の地でぶんどり物にしてください……」)。エステル記 7：8 (王が宮殿の園から酒宴の場所に帰ってみると、エステルのいた長いすの上にハマが伏していたので、王は言った、「彼はまたわたしの家で、しかもわたしの前で王妃をはずかしめようとするのか」。この言葉が王の口から出たとき、人々は、ハマの顔をおおった)。ヨブ記 19：3 (あなたがたはすでに十度もわたしをはずかしめ、わたしを悪くあしらってもなお恥じないのか)。ヨブ記 20：3 (わたしはわたしをはずかしめる非難を聞く、しかし、わたしの悟りの霊がわたしに答えさせる)。詩篇 4：2 (人の子らよ、いつまでわたしの誉をはずかしめるのか。いつまでむなしい言葉を愛し、偽りを慕い求めるのか)。詩篇 14：6 (あなたがたは貧し

い者の計画を、はずかしめようとする。しかし主は彼の避け所である)。詩篇 25：2 (わが神よ、わたしはあなたに信頼します。どうか、わたしをはずかしめず、わたしの敵を勝ち誇らせないでください)。詩篇 25：3 (すべてあなたを待ち望む者をはずかしめず、みだりに信義にそむく者をはずかしめてください)。詩篇 25：20 (わたしの魂を守り、わたしをお助けください。わたしをはずかしめないでください。わたしはあなたに寄り頼んでいます)。詩篇 31：1 (主よ、わたしはあなたに寄り頼みます。とこしえにわたしをはずかしめず、あなたの義をもってわたしをお助けください)。詩篇 31：17 (主よ、わたしはあなたに呼ばわれます、わたしをはずかしめないでください。悪しき者に恥をうけさせ、彼らに声をあげさせずに陰府に行かせてください)。詩篇 35：4 (どうか、わたしの命を求めざる者を、はずかしめ、いやしめ、わたしにむかって悪をたくらむ者を退け、あわてふためかせてください)。詩篇 35：26 (わたしの災を喜ぶ者どもを／ともに恥じ、あわてふためかせてください。わたしにむかって誇りたかぶる者どもに、恥と、はずかしめとを着せてください)。詩篇 44：7 (しかしあなたはわれらをあだから救い、われらを憎む者をはずかしめられました)。詩篇 44：15 (わがはずかしめはひねもすわたしの前にあり、恥はわたしの顔をおおいました)。詩篇 57：3 (神は天から送ってわたしを救い、わたしを踏みつける者をはずかしめられます)。詩篇 69：6 (万軍の神、主よ、あなたを待ち望む者が、わたしの事によって、はずかしめられることのないようにしてください。イスラエルの神よ、あなたを求めざる者が、わたしの事によって、恥を負わせられることのないようにしてください)。詩篇 69：19 (あなたはわたしの受けるそしりと、恥と、はずかしめとを知っておられます。わたしのあだは皆あなたの前にあります)。詩篇 71：1 (主よ、わたしはあなたに寄り頼む。とこしえにわたしをはずかしめないでください)。詩篇 71：13 (わたしにあだする者を恥じさせ、滅ぼしてください。わたしをそこなわんとする者を、そしりと、はずかしめとをもっておおってください)。詩篇 89：50 (主よ、あなたのしもべがうけるはずかしめを、みこころにとめてください。主よ、あなたのもろもろの敵はわたしをそしり、あなたの油そそがれた者の足跡をそしります。わたしはもろもろの民のそしりを、わたしのふところにいだいているのです)。詩篇 97：7 (すべて刻んだ像を拝む者、むなしい偶像をもってみずから誇る者は、はずかしめをうける。もろもろの神は主のみ前にひれ伏す)。詩篇 109：28 (彼らはのろうけれども、あなたは祝福されます。わたしを攻める者をはずかしめ、あなたのしもべを喜ばせてください)。詩篇 109：29 (わたしを非難する者にはずかしめを着せ、おのが恥を上着のようにまとわせてください)。詩篇 119：31 (主よ、わたしはあなたのあかしに堅く従っています。願わくは、わたしをはずかしめないでください)。箴言 3：35 (知恵ある者は、誉を得る、しかし、愚かな者ははずかしめを得る)。箴言 6：33 (傷と、はずかしめとを受けて、その恥をすすぐことができない)。箴言 12：16 (愚かな人は、すぐに怒りをあらわす、しかし賢い人は、はずか

しめをも気にとめない)。箴言 13：18 (貧乏と、はずかしめとは教訓を捨てる者に来る、しかし戒めを守る者は尊ばれる)。箴言 14：34 (正義は国を高くし、罪は民をはずかしめる)。箴言 18：3 (悪しき者が来ると、卑しめもまた来る、不名誉が来ると、はずかしめも共にくる)。箴言 19：26 (父に乱暴をはたらき、母を追い出す者は、恥をきたらし、はずかしめをまねく子である)。箴言 22：10 (あざける者を追放すれば争いもまた去り、かつ、いさかいも、はずかしめもなくなる)。箴言 25：8 (あなたが目に見たことを、軽々しく法廷に出してはならない。あとになり、あなたが隣り人にははずかしめられるとき、あなたはどのようにするのか)。箴言 28：7 (律法を守る者は賢い子である、不品行な者と交わるものは、父をはずかしめる)。イザヤ書 1：29 (あなたがたは、みずから喜んだかしの木によって、はずかしめを受け、みずから選んだ園によって、恥じ赤らむ)。イザヤ書 9：1 (しかし、苦しみにあった地にも、やみがなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にははずかしめを与えられたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光栄を与えられる)。イザヤ書 16：14 (しかし今、主は語って言われる、「モアブの栄えはその大なる群衆にもかかわらず、雇人の年期とひとしく三年のうちに、はずかしめを受け、残れる者はまことに少なく、力がない」。イザヤ書 23：9 (万軍の主はすべての栄光の誇を汚し、地のすべての尊い者をはずかしめるため、これを定められたのだ)。イザヤ書 25：8 (主はとこしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである)。イザヤ書 29：22 (それゆえ、昔アブラハムをあがなわれた主は、ヤコブの家についてこう言われる、「ヤコブは、もはやはずかしめを受けず、その顔は、もはや色を失うことはない……」)。イザヤ書 30：3 (それゆえ、バロの保護は、かえってあなたがたの恥となり、エジプトの陰に隠れることは、あなたがたのはずかしめとなる)。イザヤ書 30：5 (彼らは皆おのれを益することのできない民により、すなわち助けとならず、益とならず、かえって恥となり、はずかしめとなる民によって、恥をかくからである)。イザヤ書 37：3 (彼らはイザヤに言った、「ヒゼキヤはこう言います、『きょうは悩みと責めと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、これを産み出す力がないのです……』)。イザヤ書 45：16 (偶像を造る者は皆恥を負い、はずかしめを受け、ともに、あわてふためいて退く)。イザヤ書 45：17 (しかし、イスラエルは主に救われて、とこしえの救を得る。あなたがたは世々かぎりなく、恥を負わず、はずかしめを受けない)。イザヤ書 50：7 (しかし主なる神はわたしを助けられる。それゆえ、わたしは恥じることがなかった。それゆえ、わたしは顔を火打石のようにした。わたしは決してはずかしめられないことを知る)。イザヤ書 54：4 (恐れてはならない。あなたは恥じることがない。あわてふためいてはならない。あなたは、はずかしめられることがない。あなたは若い時の恥を忘れ、寡婦であった時のはずかしめを、再び思い出すことがない)。イザヤ書 61：7 (あなたがたは、

さきに受けた恥にかえて、二倍の賜物を受け、はずかしめにかえて、その嗣業を得て楽しむ。それゆえ、あなたがたはその地であって、二倍の賜物を獲、とこしえの喜びを得る)。エレミヤ書 2:26 (盗びとが捕えられて、はずかしめを受けるように、イスラエルの家は、はずかしめを受ける。彼らはその王も、そのつかさも、その祭司も、その預言者もみなそのとおりである)。エレミヤ書 2:36 (あなたはなぜ軽々しくさまよって、その道を変えようとするのか。あなたはアッスリヤに、はずかしめを受けたように、エジプトにもまた、はずかしめを受ける)。エレミヤ書 3:25 (われわれは恥の中に伏し、はずかしめにおおわれています。それはわれわれと先祖とが、われわれの幼少の時から今日まで、われわれの神、主に罪を犯し、われわれの神、主の声に従わなかったからです)。エレミヤ書 8:9 (知恵ある者は、はずかしめられ、あわてふためき、捕えられる。見よ、彼らは主の言葉を捨てた、彼らになんの知恵があろうか)。エレミヤ書 9:19 (「……シオンから悲しみの声が聞える。それは言う、『ああ、われわれは滅ぼされ、いたく、はずかしめられている。われわれはその地を去り、彼らがわれわれのすみかをこわしたからだ』)。エレミヤ書 13:22 (あなたが心のうちに、「どうしてこのようなことが、わたしに起ったのか」というならば、あなたの罪が重いゆえに、あなたの着物のすそはあげられ、はずかしめを受けるのだ)。エレミヤ書 14:21 (み名のために、われわれを捨てないでください。あなたの栄えあるみ位を、はずかしめないでください。あなたがわれわれにお立てになった契約を覚えて、それを破らないでください)。エレミヤ書 15:15 (主よ、あなたは知っておられます。わたしを覚え、わたしを顧みてください。わたしを迫害する者に、あだを返し、あなたの寛容によって、わたしを取り去らないでください。わたしがあなたのために、はずかしめを受けるのを知ってください)。エレミヤ書 17:18 (わたしを攻め悩ます者はずかしめてください。しかしわたしはずかしめないでください。彼らを恐れさせてください。しかしわたしを恐れさせないでください。災の日を彼らにきたらせ、滅びを倍にして彼らを滅ぼしてください)。エレミヤ書 20:8 (それは、わたしが語り、呼ばれるごとに、「暴虐、滅亡」と叫ぶからです。主の言葉が一日中、わが身のはずかしめと、あざけりになるからです)。エレミヤ書 23:40 (「……そして、忘れられることのない永遠のはずかしめと永遠の恥を、あなたがたにこうむらせる』)。エレミヤ書 24:9 (わたしは彼らを地のもろもろの国で、忌みきらわれるものとし、またわたしの追いやるすべての所で、はずかしめに会わせ、ことわざとなり、あざけりと、のろいに会わせる)。エレミヤ書 25:9 (見よ、わたしは北の方のすべての種族と、わたしのしもべであるバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この地とその民と、そのまわりの国々を攻め滅ぼさせ、これを忌みきらわれるものとし、人の笑いものとし、永遠のはずかしめとすると、主は言われる)。エレミヤ書 29:18 (わたしはつるぎと、ききんと、疫病をもって彼らのあとを追ひ、また彼らを地の万国に忌みきらわれるものとなし、わたしが彼らを追いやる国々

で、のろいとなり、恐れとなり、物笑いとなり、はずかしめとならせる)。エレミヤ書 31：19 (わたしはそむき去った後、悔い、教をうけた後、ももを打った。若い時のはずかしめが身にあるので、わたしは恥じ……)。エレミヤ書 38：19 (ゼデキヤ王はエレミヤに言った、「わたしはカルデヤびとに脱走したユダヤ人を恐れている。カルデヤびとはわたしを彼らの手に渡し、彼らはわたしをはずかしめる」)。エレミヤ書 42：18 (万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、わたしの怒りと憤りとをエルサレムの住民の上に注いだように、わたしの憤りは、あなたがたがエジプトへ行くとき、あなたがたの上に注ぐ。あなたがたは、のろいとなり、恐怖となり、ののしりとなり、はずかしめとなる。あなたがたは再びこの所を見ることができない)。エレミヤ書 44：8 (なぜあなたがたはその手のわざをもってわたしを怒らせ、あなたがたが行って住まうエジプトの地で、ほかの神々に香をたいて自分の身を滅ぼし、地の万国のうちに、のろいとなり、はずかしめとなろうとするのか)。エレミヤ書 44：12 (またわたしは、エジプトの地に住むために、むりに行ったあのユダの残りの者を取り除く。彼らはみな滅ぼされてエジプトの地に倒れる。彼らは、つるぎとききんに滅ぼされ、最も小さい者から最も大いなる者まで、つるぎとききんによって死ぬ。そして、のろいとなり、恐怖となり、ののしりとなり、はずかしめとなる)。エレミヤ書 46：24 (エジプトの娘ははずかしめを受け、北からくる民の手に渡される)。エレミヤ書 48：1 (モアブの事について、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、「ああ、ネボはわざわいだ、これは滅ぼされた。キリヤタイムははずかしめられて取られ、とりでは、はずかしめられてこわされた……」。エレミヤ書 50：2 (「国々のうちに告げ、また触れ示せよ、旗を立てて、隠すことなく触れ示して言え、『バビロンは取られ、ベルははずかしめられ、メロダクは砕かれ、その像ははずかしめられ、その偶像は砕かれる』と」)。エレミヤ書 50：12 (あなたがたの母はいたくはずかしめられ、あなたがたを産んだ者は恥をこうむる。見よ、彼女は国々のうちの最もあとなるものとなり、かわいた砂原の荒野となる)。エレミヤ書 51：47 (それゆえ見よ、わたしがバビロンの偶像を罰する日が来る。その全地ははずかしめられ、その殺される者はみなその中に倒れる)。哀歌 2：2 (主はヤコブのすべてのすまいを、滅ぼして、あわれまず、その怒りによって、ユダの娘のとりでをこわし、これを地に倒して、その国とそのつかさたちをはずかしめられた)。哀歌 3：30 (おのれを撃つ者にほおを向け、満ち足りるまでに、はずかしめを受けよ)。哀歌 5：1 (主よ、われわれに臨んだ事を／覚えてください。われわれのはずかしめを顧みてください)。エゼキエル書 16：52 (あなたはその姉妹を有利にさばいたことによって、あなたもまた自分のはずかしめを負わなければならない。それはあなたが彼らよりも、さらに憎むべきことをした罪によって、彼らはあなたよりも義とされるからである。それであなたも恥を受け、はずかしめを負わなければならない。それはあなたがその姉妹を義と見せかけたからである)。エゼキエル書 16：54 (これはあなたに自分のはずか

しめを負わせるため、またすべてあなたのなした事を恥じさせるためである。こうしてあなたは彼らの慰めとなる)。エゼキエル書 20 : 9 (しかしわたしはわたしの名のために行動した。それはエジプトの地から彼らを導き出して、周囲に住んでいた異邦人たちに、わたしのことを知らせ、わたしの名が彼らの目の前に、はずかしめられないためである)。エゼキエル書 34 : 29 (わたしは彼らのために、良い栽培所を与える。彼らは重ねて、国のききに滅びることなく重ねて諸国民のはずかしめを受けることはない)。エゼキエル書 36 : 6 (それゆえ、あなたはイスラエルの地の事を預言し、山と、丘と、くぼ地と、谷とに言え。主なる神はこう言われる、見よ、あなたがたは諸国民のはずかしめを受けたので、わたしはねたみと怒りとをもって語る)。エゼキエル書 36 : 7 (それゆえ、主なる神はこう言われる、わたしは誓って言う、あなたがたの周囲の諸国民は必ずはずかしめを受ける)。エゼキエル書 36 : 10 (わたしは重ねて諸国民のはずかしめをあなたに聞かせない。あなたは重ねて、もろもろの民のはずかしめを受けることはなく、あなたの民を重ねてつまずかせることはない、主なる神は言われる)。エゼキエル書 36 : 30 (またわたしは木の実と、田畑の作物とを多くする。あなたがたは重ねて諸国民の間に、ききんのはずかしめを受けることがない)。ホセア書 12 : 14 (エフライムはいたく主を怒らせた。それゆえ主はその血のとがを彼の上にのこし、そのはずかしめを彼に返される)。ヨエル書 2 : 26 (あなたがたは、じゅうぶん食べて飽き、あなたがたに不思議なわざをなされた、あなたがたの神、主のみ名をほめたたえる。わが民は永遠にはずかしめられることがない)。ヨエル書 2 : 27 (あなたがたはイスラエルのうちに、わたしのいることを知り、主なるわたしがあなたがたの神であって、ほかにないことを知る。わが民は永遠にはずかしめられることがない)。ミカ書 6 : 16 (あなたはオムリの定めを守り、アハブの家のすべてのわざをおこない、彼らの計りごとに従って歩んだ。これはわたしがあなたを荒し、その住民を笑い物とするためである。あなたがたは民のはずかしめを負わねばならぬ)。ナホム書 3 : 6 (わたしは汚らわしい物を、あなたの上に投げかけて、あなたをはずかしめ、あなたを見ものとする)。ゼパニヤ書 3 : 11 (その日には、あなたはわたしにそむいたすべてのわざのゆえに、はずかしめられることはない。その時わたしはあなたのうちから、高ぶって誇る者どもを除くゆえ、あなたは重ねてわが聖なる山で、高ぶることはない)。ゼカリヤ書 9 : 5 (アシケロンはこれを見て恐れ、ガザもまた見てもだえ苦しみ、エクロンもまたその望む所のものが、はずかしめられて苦しむ。ガザには王が絶え、アシケロンには住む者がなくなり)。ルカによる福音書 6 : 28 (のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ)。ルカによる福音書 18 : 32 (人の子は異邦人に引きわたされ、あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ)。使徒行伝 14 : 5 (その時、異邦人やユダヤ人が役人たちと一緒にあって反対運動を起し、使徒たちをはずかしめ、石で打とうとしたので……)。ローマ人への手紙 1 : 24 (ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはず

かshめて、汚すままに任せられた)。コリント人への第一の手紙1:27(それなのに神は、知者はずかshめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかshめるために、この世の弱い者を選び……)。コリント人への第一の手紙4:12(苦勞して自分の手で働いている。はずかshめられては祝福し、迫害されては耐え忍び……)。コリント人への第一の手紙4:14(わたしがこのようなことを書くのは、あなたがたはずかshめるためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさとするためである)。コリント人への第一の手紙6:5(わたしがこう言うのは、あなたがたはずかshめるためである。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することができるほどの知者は、ひとりもないのか)。コリント人への第一の手紙11:4-5(祈をしたり預言をしたりする時、かしらに物をかぶる男は、そのかしらはずかshめる者である。祈をしたり預言をしたりする時、かしらにおおいをかけない女は、そのかしらはずかshめる者である。それは、髪をそったのとまったく同じだからである)。コリント人への第一の手紙11:22(あなたがたには、飲み食いをする家がないのか。それとも、神の教会を軽んじ、貧しい人々はずかshめるのか。わたしはあなたがたに対して、なんと言おうか。あなたがたを、ほめようか。この事では、ほめるわけにはいかない)。コリント人への第一の手紙15:34(目ざめて身を正し、罪を犯さないようにしなさい。あなたがたのうちには、神について無知な人々がいる。あなたがたはずかshめるために、わたしはこう言うのだ)。テサロニケ人への第一の手紙2:2(それどころか、あなたがたが知っているように、わたしたちは、先にピリピで苦しめられ、はずかshめられたにもかかわらず、わたしたちの神に勇気を与えられて、激しい苦闘のうちに神の福音をあなたがたに語ったのである)。ヘブル人への手紙13:13(したがって、わたしたちも、彼はずかshめを身に負い、営所の外に出て、みもとに行こうではないか)。ヤコブの手紙2:6(しかるに、あなたがたは貧しい人はずかshめたのである。あなたがたをしいたげ、裁判所に引きずり込むのは、富んでいる者たちではないか)。

キーワード：東方キリスト教、正教、闇、暴力、トラウマ